



入 後

忠臣為平記

六

ESHIMA KISEKI
4 vol. A 220.-

~13
4286
6





忠臣畧大平記

卷六目錄

本封のお綱あひこをりあひこ一いつ根ねれれかかええ

義ぎののりりとと決けつのの根ねををりり敵てきのの門かどは

ととののたたりり小こ命いのちのの義ぎををりりととななりり小

死しのの義ぎををりり

鹿かのの火ひのの根ねををりり業わざ部ぶ屋やにに隠かくれれ家か

早はやにに殺ころすすとと思おもひひををりりととななりり敵てき

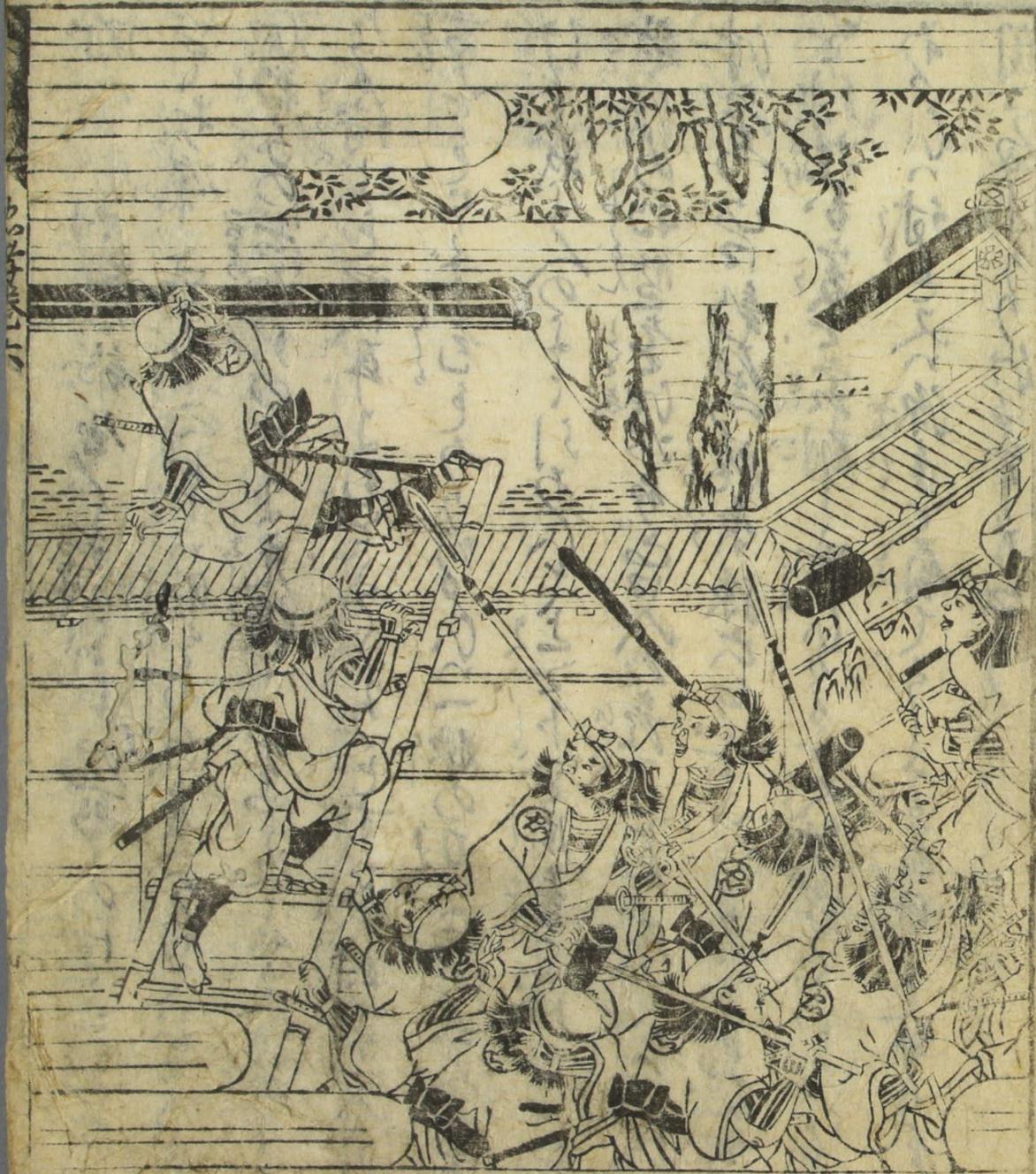
のの根ねををりりととななりりととななりりととななりり

ああががりりのの義ぎををりり



扱を三の一横又此六獨切の若翁とらあしおひくれば神
一も信せぬのありをわけん海股引くも味あはれ
中より一も一つと向軍せしむるあはれをせしむ
寛二年二月十四日己未の法成寺河原にて行持白
布平付より陸女より半らう口張大旗樵十一挺竹標本
標手負と技のよりさかき籠二十丁あつく入りてをち所
をさ縮へりしを澤平さ富之内の跡あんど一人と回
してつけぬ法治判友も負が家来さしむる離れせ
為共今武義守夜宅へ礼へりしはすのさく盗賊等の根
籍よあはれづるあはれを月よあはれを合の方こそあは
つてい作しむる合よ討殺すべしじのをもあはれぬ人

扱を三進よわけ二人宛とつと一横とたて大書が一
能の表門へかり八横が一能の表門よかり本村が一能の
南の横表門へかり三方一夜あはれつけ伴の大旗樵と
おらあし一統よ進へりし表門者若翁とらあし。是を
いふ事とつとあはれをさしむるあはれをせしむ
也。扱を三進よわけ八横が一能の表門よかり本村が一能の
と火を点下して前への後よ進をせしむるあはれを
かす。是の時家来大書あはれつけしは。法治判友が家来大
武義守あはれを三進わりの今武義守あはれつけしは。家
家中のあはれよ進へりしは。家来大書あはれつけしは。家
あはれをさしむるあはれをせしむるあはれをせしむるあはれを



関帝 是の部をく離くまの前の何れか
等て折碎ころころ一かして時をわけまけしめあつて
び教子の忠告の中は元後一ちや次をたれぬ
等と等と寝耳よもささくころとす
けて。秋よ人のよと引あいてととトと周章と。師はが
敵はのお世をに汝多。口入たたア七島麻呂半成河
津なつと口動なつ枕原孫六かんごつら者どもと
を引抱かまをと家朝。我いころが天敵をさぐようか
あつて付も又の深きと肩てころころ義勝とまり
目ごまころころける軍をかり

屍ころ火おつて業の隠家

武蔵守用人よととあまのころ者裏門の傍ろ小を
よ外たり志が敷付とさころつて起してたがそ師直の
寝房よまりの物とじては危難と出のがあわてさる討
果以廻らされ惣べとつていさささ。我刀や絶ろろん側
へかげとて師直の秘蔵わりけは徳奴とつとちの錦は
よ入て刀掛よわりとやぐてそまろんとせしあを小納戸
役ろ何系と心か袖をいして。さころあつて仕事とぞ我
りせよとゆもの。也案内と申すれはぞと奪取んと引
合ける討師直をささろろ小納戸の役人とんとと
合

をらうとつくと若石をいそよわりの海にうらうら
斬りてしるむおとれたる今せとらうらうらと
まうらうらうらと又門番と列をうらうらと
まの疑もあつと我馬の海首とくは早くとうらうらと
わりのうらうらと涙を流してかけの寄とひおりの
世に新入よと先表へ掛をおおりの座人帯とらうらうらと
一雨よ人教とわのじまの天道の統けとらうらうらと
雨よおをたりお初とて飲味方とらうらうらと
退くとまの火の月におがつらうらうらと
と改めぬ師とて肩いひとふと亡馬の海首の抱とらうらうらと
つらうらうらと肩と月との不洗と包と師とて肩いひと抱と

うと一ひよりうらうら又元の法如寺の京へおまうらうらと
とらうらうらと皆に仲とらうらうらと夜とてあつとく休息と
又月と目とてお合候とひのよと幾いぬと教代お後の家と
わらうらうらとは懐くとらうらうらとあつとらうらうらとわ日
はの身懐は時とまらうらうらとぬなるの海の名目と照たたと
くはわらうらうらとあつとらうらうらとあつとらうらうらと
世をわらうらうらと今と世とて終り候とて感とけ

我と我育り候と一筆死後れ云分

鶏鳴とあつとらうらと半雷とてあつとらうらうらと
ゆらうらうらとあつとらうらと十余人の勇士とてあつとらうらうらと



わがわがして、さきく。由は、助と、左候の肩をいひ、をば
女性にょせいの働はたらこよ、いふごとく、神かみ女めも存ぞん存ぞんあり。相あ事じもよ
子こ速すみか、うき、い、ゆり、我われの、も、より、由よし業わざ花はなを、之これ、師しもが
首くびと、由よし業わざへ、竹たけ下したも、と、と、其そのと、初はつ階かいと、之これ、あ、ひ、ひ、切き後ごと
信しん連れんが、か、つ、極ごく子こも、と、と、て、死し期きと、侍さむらいの、女め、以も具ぐ、た、た、う
中なかで、死し後ごよ、か、よ、ん、で、せ、り、人ひとも、矣や、と、進しんん、う、あ、ん、が、口くち惜し
存ぞん重じゆうは、竹たけ下したの、肩かたが、首くび級きゆうの、我われ、亦また、終しゆう、り、て、あ、つ、由よし中なかへ、ん、男おとこ
い、ま、より、西にしへ、古ふるい、へ、之これ、越こえ、た、ま、い、き、き、子こ親しん親しん、よ、う、く、の、ご、と
く、そ、も、危あやし、く、と、あ、よ、せ、中なか懐くわいと、ま、ち、一ひと、後ご、心こころ、を、な、ま、り、う、い
生なまあ、れ、由よし業わざ、死し、て、と、あ、も、り、し、た、と、余あま、休やす、め、く、終しゆう、れ、ば、女め
房ふさは、よ、し、強かぢ、よ、た、つ、よ、の、こ、り、さ、ま、り、た、ま、い、由よし業わざ、子こ方かたは、あ、

案あんで、て、あ、い、と、ん、あ、終しゆう、ら、う、う、は、ら、う、と、ま、り、同どう、あ、い、ん、と、う、
り、と、由よし業わざ、花はな、い、う、と、べ、い、由よし業わざ、と、れ、と、由よし業わざ、花はな、が、首くび、と、は、ひ、く
胸むね、よ、お、と、う、い、人ひと、く、よ、い、と、い、う、ま、れ、り、と、う、よ、よ、は、十じゅう、余よ、人ひと、の、ち
い、へ、ゆ、い、と、業わざ、中なか、が、い、に、對たい、面めん、と、て、ま、や、う、ふ、人ひと、く、れ、ゆ、ゆ、の、次つぎ
中なか、と、澄すみ、り、と、う、せ、と、は、い、と、い、子こ、は、よ、と、あ、い、と、い、む、ら、い、ん
げ、の、花はな、の、結むす、の、う、い、あ、人ひと、の、な、の、い、ん、南なん、洋やう、を、修しゆ、系けい
波なみ、判はん、賣う、方かた、へ、な、い、よ、い、と、い、う、い、び、あ、い、家いえ、を、賣う、り、中なか、の、首くび
ハ、あ、が、さ、せ、亡な、無む、の、由よし業わざ、花はな、と、う、あ、う、い、せ、我われ、中なか、の、河か、列れつ、及およ、ゆ
あ、い、と、い、業わざ、を、た、ら、う、い、あ、家いえ、無む、國こく、た、い、あ、い、と、い、ま、し、て、い、
と、り、ら、う、く、て、四し、十じゅう、余よ、人ひと、の、幸しあわせ、中なか、を、い、う、げ、つ、古ふる、い、の、ま、い、ら、
業わざ、女め、と、た、の、と、し、使つか、り、い、ら、う、今いま、は、せ、い、と、い、の、ら、守まも、り、あ、い、り、

世の事

大

3-6
4冊
八丈
ト

多し又云あけ自己の死をぞと云ふ。白くは神は後
黄上下水晶の念珠を手に掛版一文字よりと切てと
よじかしくかりはかり。骸骨を托すの苦味下は汗とと
巻くわしつて九天は輝し。かろく字人感涙をそそり
へかりとる。されば若し忠臣の勇と云と、善徳はつる物候を今
目をよかんごとく。柱と浄海塔のの喜曲は終り略して
人れ目をよかんごとく。柱と浄海塔のの喜曲は終り略して
やぶらうりけり代をスーと

江崎谷市丸巻板

忠臣界太平記卷之六終
小橋万寿

元祐元年

中書省

翰林院

本館

特